

## 長林寺の世代と末寺の関係について

—『住山記』の記録を通して—

尾崎 正善

### はじめに

周知のように、現在横浜の鶴見にある大本山總持寺は、明治三十一年に火災で焼失するまでは、石川県鳳至郡門前町に在り、永平寺と並び両本山として大きく発展していた。總持寺教団が大きく展開してゆく過程において、輪住制及び一夜住職（瑞世）の制度が大きく働いていたことは夙に知られるところである。その瑞世の記録として、總持寺所蔵の『總持禪寺開山以来住持之次第』（以下、『住山記』と略す）は第一世瑩山紹瑾禪師から、明治三年（一八七〇）七月二五日に輪住制が廃止され独住制が行われるまでの、約五五〇年間、「二三五卷」、第四万九千七百六十六世までの住持の記録が残されている。（但し、瑞世の記録は、「卷二三六」、第五万五百三十世、明治七年五月廿九日まで残されている。さらに、横浜移転後の資料は、「東京」一〇十五として、第五万七千五百六十五世、明治四十二年六月廿四日までである。）

その記録は、江戸時代の瑞世者が中心となるが、曹洞宗の僧侶の名簿としては、『曹洞宗大系譜』の約七万名につぐ膨大な量を有している。さらに、受業師名・嗣法師名を加えるならば、数的にはそれを凌ぐことが考えられる。仏教文化研究所ではその入力作業を六年ほど前からおこない、漸くその作業の目途が付く状況を迎えている。しかし、入力作業を行っただけで、未だ充分な校正等の作業まで行っておらず、それらに関しては、今後の大きな課題となっている。

さて、本年度足利の長林寺（足利市山川）において、『下野山川長林寺の研究』という寺史の編集がなされた。寺史編纂に当たっては、筆者もその作業の一部を担当し、「長林寺の展開―特に本末関係を中心として―」一編を寄稿している。

本論では、寺史において紙幅の関係もあり十分に論じることの出来なかった、『住山記』を中心とした長林寺の世代と末寺の関係について再度論考を試みるものである。つまり、主たる目的は、長林寺の世代の関係を末寺を中心に明らかにすることではあるが、あわせて『住山記』の持つ資料的な価値、さらには今後の有効な利用への一つの方向性を示すことを目指している。

なお、先の拙稿と一部重複する箇所があることを予め御容赦願いたい。

### 『住山記』の記載内容

最初に『住山記』の記載内容について簡単に触れておきたい。

記載の内容は、瑞世師名・寺院名・受業師・嗣法師・国名、さらに各派の名である。その書式の一例を上げると次のような形式である。

通幻派

受業師義軍和尚

下野之

一万八百三十九世 可愼和尚 元禄六癸酉曆三月十四日

無量寺

嗣法師朔道和尚

住僧也

但し、この形式が全てに当てはまるわけではなく、記載がなされない箇所や、逆に僧名が道号も含め四文字もしくは三文字の場合もある。また世代が重複する部分や、数世代にわたって記載されていない箇所もあり、世代数と禅者の数は必ずしも一致しない。

いずれにせよデータとしては、瑞世師を検索すれば、出身地や寺院、瑞世の日時が判明するので、もしも同名の禅者が複数いたとしてもその中から該当する人物を捜す出することが容易である。さらに瑞世を行った本人だけでなく、受業師・嗣法師という法系の確認も行なうことができ、その資料的価値・利用の可能性は計り知れない。

なお、『住山記』の詳しい書誌並びに内容の分析は改めて行なう予定である。

### 長林寺の展開と末寺

次に、長林寺の歴史について簡単に触れておこう。

長林寺の前身である金剛山東林寺は、明応八年（一四九九）に常陸の小莖（現・茨城県牛久市）に創建された。開山は天助高順で、この地に約九〇年間あったが岡見家滅亡と共に、兵火により堂宇を焼失した。天正年間（一五七八〜九二）に足利の地に移転した。この足利への移転に努めたのが、七世の中興源室永高である。後に彼は長松寺・長福寺・喜運寺等を開いている。

以上、長林寺の展開は、開創当時の牛久地域と足利移転後との大きく二段階に分けられる。つまり戦国末を挟ん

で、牛久地域と足利地域の二つの地域と、戦国期と幕藩体制下という二つの時代の異なる体制の下でそれぞれ展開したといえる。

さて次ぎに末寺の關係を見ると以下の十一ヶ寺となる。（『延享度本末牒』の記載順）

蓮光寺 埼玉県川越市

寶泉寺 茨城県竜ヶ崎市泉町

喜運寺 東京都文京区白山

長松寺 栃木県足利市山下町

長福寺 栃木県足利市梁田町

無量寺 栃木県足利市樺崎町

源光寺 (旧) 足利郡樺崎村 廢寺

大乘院 (旧) 足利郡樺崎村 廢寺

高庵寺 栃木県足利市宮北町

高沢寺 栃木県足利市下渋垂町

長泰寺 茨城県稲敷郡阿見町島津

これを長林寺の地域的展開の關係に当てはめると、牛久の東林寺を中心とする地域に、宝泉寺・長泰寺（以上、二カ寺）、足利移転以降は長福寺・高庵寺・高沢寺・長松寺・無量寺・源光寺・大乘院（以上、七カ寺）、さらに川越の蓮光寺・江戸の喜運寺のグループとに分けられ、時代毎に末寺が増加していったと考えられる。

しかし、こうした本末關係がその創建当時より順次形成され、なんら問題なく機能していたのかといえれば決して

そのようなことはない。先の拙稿において既に指摘したように、『延享度曹洞宗寺院本末牒』(以下、『延享度本末牒』と略す<sup>①</sup>)と『曹洞宗通幻派本末記』<sup>②</sup>との間に本末に関する大きな差違が確認できることから、長林寺の本末関係やその展開が現在知られるような形になるまでには、多くの曲折を経ていたであろう事は想像に難くない。

一方、その地域的な展開を見たときに、牛久地域と足利地域ではその性格が大きく異なることも確認できる。それは、牛久地域が在地の領主の庇護の下で寺院を建立したのに対して、足利地域は既存の寺院の取り込み、つまり廃寺等を曹洞宗に転宗した可能性が高いのである。こうした末寺の展開は、ある意味で曹洞宗の展開における一つの典型的な例であり、曹洞宗教団の歴史を考える上でも好資料といえよう。

本論においては、長林寺の展開を末寺との関係を中心に考え行くのであるが、特に、『住山記』の記録を見直したところ、足利地域の展開を考える上で廃寺であるために今まで充分検討されていなかった、樺崎地区の諸寺院の位置づけをも明らかにすることができた。足利地域の展開を見る前に、簡単に牛久時代に触れておこう。

### 長林寺の展開と末寺(牛久時代)

さて、牛久を中心とした長林寺(東林寺)の末寺の展開であるが、この時代に関しては、資料も乏しいが、『竜ヶ崎市史』「中世編」等の記載を参考に見てゆきたい。

この時代の末寺としては、稲敷郡阿見町島津の長泰寺・竜ヶ崎市泉町の宝泉寺の二ヶ寺が存する。

まず、法泉寺であるが、この寺に関しては、無住の時代に寺が荒廃し、過去帖も残っておらず、また歴住の墓塔も判読不能である。また、寺伝等も判然としないが、長林寺文書に「宝泉寺縁起」(正徳六年(一七一六))が残されている。

それによると、開基は東林昌源なる人物で天文（一五三二―五五）の初め梵刹の建立を発願し、天文一三年（一五四四）孟夏、東林三世銘室高信和尚を開祖に招いた。高信が弘治三年（一五五七）九月一八日に亡くなると、その後、法灯を伝える人がなかったが、二十余年して再び昌源が東林寺から大雲梵虎を招いて中興させた。時に天正三年（一五七五）一二月上旬であった。梵虎は文禄元年（一五九二）五月二五日に寂したが、その後は法孫が興隆に努め、今に至っている。

これを著したのは、長林一八世活翁禅龍（一七五〇年寂）であり、宝泉寺での世代は不詳であるが、正徳六年三月の年号が確認できる。

一方、『竜ヶ崎市史』の記載に依れば、土岐信濃守が母親（昌春庵主）のために寺地と田畑一町六反歩を寄進し、東林寺三世の銘室高信を開山として迎えたとされる。但し、土岐信濃守なる人物および昌春庵主の問題等、不明の点の多いことも同時に記されている。

また、この地が鎌倉後期から戦国時代にかけて、東条氏の一族、東条泉氏が支配していたことも指摘されている。さらに宝泉寺の近くから、多数の石塔や埋蔵銭が発掘されており、これは宝泉寺創建以前に、その前身となる寺院及び庵等が存在した可能性を示す物とされている。何れにせよ、土岐氏配下以前の寺院の存在も、宝泉寺の歴史を考える上では想定されるのである。

一方、東林寺との関係としては、

- |    |                    |         |
|----|--------------------|---------|
| 三世 | 銘室高信（一五五七年 九月一八日寂） | 〔宝泉寺開山〕 |
| 四世 | 意伝宗順（一五六三年二月一七日寂）  | 〔宝泉寺二世〕 |
| 五世 | 大雲梵虎（一五九二年 五月二五日寂） | 〔宝泉寺三世〕 |

九世 明堂梵喆（一六二〇年 八月二〇日寂）〔宝泉寺五世〕

一八世 活翁禪龍（一七五〇年 六月二八日寂）〔宝泉寺世代不詳〕

というように、継続的に相互の住持の行き来が確認できる。それは、足利移転後も行われていた。長林寺（東林寺）から宝泉寺への住持の晋住、さらにその逆の形も考えられるが、開山・中興というその初期の段階も含め、頻繁に行われていたことは、地理的な関係からも想像できる。しかし、それが長林寺が足利に移転した江戸期に入ってからも行われていたのであるから、その関係はとても強かったであろう。

特に「宝泉寺縁起」を著した、一八世活翁禪龍は、後にも述べるが、『住山記』の記録により、源光寺から宝永四年（一七〇七）三月三〇日に総持寺に瑞世しており、その後宝泉寺に入り、正徳六年（一七一六）に「縁起」を著し、十七世悟山元明が寛保元年（一七四一）六月一七日に示寂する前後に長林寺に入り、寛延三年（一七五〇）に寂するという、かなり具体的な住職の状況が明らかになった。

次に、長泰寺は、天正一四年（一五八六）二月の創建とされる。一説には文禄四年（一五九五）とされるが、これは開山の寂年をいうのであろう。いずれにせよ長林寺（東林寺）が足利に移転する以前、六世天安祖準（一五九五年二月五日寂）を開山とする。ただし、長林十世密伝大察（一六五〇年五月二八日寂）を中興開山に迎えていることから、実質的に現在の基を築いたのは、江戸期に入ってからと考えられる。

また開基に関しては、地頭宮本内膳正・本光宗伝庵主（承応三年〔一六五四〕寂）と後の記録があるだけで、開創期の外護者は判然としないが、この地域に古くから勢力を持った土岐氏の旧家臣であった宮本家の関係者でないかと想像できる。寺伝では、はじめ島津城址に隣接する台地にあったが、元禄十三年（一七〇〇）、天明六年（一七八六）十一月と二度の火災に遭い、現在地に移転してきた。移転の距離としては、小さいな山一つ超えた程であ

ろう。

では、旧東林寺の關係はいかなるものであったのか。直接的には六世天安祖準以降、足利に移転の後も十世密伝大察・十一世名巖堯譽、さらに大きく時代は下るが廿六世覺玄歩淳（一八八四年四月八日寂）が長泰寺十六世を務めていることから、相互の關係は特に江戸初期、深いものがあつたと考えられる。さて、先に示した『住山記』の記録に覺玄歩淳の名を見ることが出来る。

卷一二七、第四万五千七百九十、覺玄、安政二（一八五五）九、一一、泰玄、歩関、長泰寺、常州

これにより、覺玄が、長林寺廿四世泰玄歩道の下で受業し、廿五世透秀歩関より嗣法するという、その密接さが改めて確認できる。

一方、外護者の視点から見ると、東林寺が岡見家支配地、長泰寺が土岐氏の支配地域ということで、いささか不自然さを感じるが、先に述べる宝泉寺も同じ条件であり、当時の支配者層の入り組んだ人間關係・婚姻關係を考慮すればあながち否定的な要因ともいえないのであろう。

牛久地域の末寺は、長泰寺と宝泉寺の二カ寺しか現存していないが、ここにおいては宝泉寺が重要な位置を占めていたと考えられる。これに対して、長泰寺は足利移転直前の創建ではあるが、実質的には江戸期以降の再興と考えてよいであろう。しかし、どちらの寺院も長林寺が足利に移転して以降も、住持職が相互に關係していることから、その繋がりを継続していたことは確認できる。これは、次に述べる足利地域の末寺との關係にも強く見られる点で、江戸時代長林寺を中心とした、住持職の相互關係が形成されていたと見て間違いないであろう。

さらに、これは推測の域を出ないが、本末帳には記載されないが、岡見家滅亡、足利移転に伴い廃寺になった寺院も存在したのではなからうか。



長林寺（東林寺）の牛久における展開は、在地の領主層の帰依を受けて子院を建立するという、戦国期の曹洞宗教団の展開の典型的な事例として見る事が出来る。

### 長林寺の展開と末寺（足利地域）

さて、牛久の長林寺（東林寺）は、岡見家が下妻の多賀谷氏に滅ぼされると同時期、灰燼に帰してしまった。その地での復興も当然可能性としては否定できないが、結果的に足利に移転することとなる。移転の時期は正確にはわからないが、江戸時代の直前で、第七世源室永高がその任を負った。源室永高に関して不明な点が多いが、『大祥山長林寺の歴史』<sup>3</sup>によると、山川村『河田氏過去帳』・山下村『長松寺伝』の記録から、河田重親の息子、河田長相の兄弟としている。しかし、この記述が何処まで史実であるか現時点では疑わしい。

さらに疑問点として上げられるのは、足利に移った理由は何か、何故、牛久における復興が叶わなかったのか、当時、源室永高つまり長林寺（東林寺）を足利に積極的に招いた人物は誰だったのか等の問題が想定される。特に外護者が誰であったかを明らかにすることは、移転の問題も含め、足利地域との関係、梁田の長福寺・山下の長松寺、さらに東京白山の喜運寺との関係も明確にすることができるとはなからうか。これらの問題に関しては、現時点では判然としないので、ここではその指摘までにとどめる。

さて次に足利移転後の展開を開山及び地域の分類で見よう。

〔足利西部〕	長松寺	栃木県足利市	山下町	開山・源室永高
〔梁田地区〕	長福寺	栃木県足利市	梁田町	開山・源室永高
	高沢寺	栃木県足利市	下渋垂町	開山・雲樵祖養

〔袋川流域〕 高庵寺 栃木県足利市 宮北町 開山・雲樵祖養

〔樺崎地区〕 無量寺 栃木県足利市 樺崎町 開山・雲樵祖養

源光寺 (旧) 足利郡樺崎村 廃寺 開山・不詳

大乘院 (旧) 足利郡樺崎村 廃寺 開山・不詳

以上、大きく分けて四つの地域と二名の開山に分かれるが、それぞれの展開の特徴を指摘してみよう。

最初に「足利西部」の長松寺であるが、この寺は、先の拙稿でも触れたように智光寺との関係が想定されている。智光寺とは、足利泰氏（一二二六―七〇）が文永二年（一二六五）に建立した寺院である。長松寺は、この智光寺と隣接していたばかりでなく、相前後して建立されたとされる。明治三年の「岩溪山長松寺由緒書」によると、長松寺は文永元年（一二六四）、智光寺の開基である足利泰氏が武運長久を祈願の為に建立し、岩溪和尚を開山として迎えた。その時の山林田畑の寄進状があった。さらに、足利尊氏（一二三〇―五八）が観応二年（一二三五一）に石塔を建立し、寄進状も与えられていた。しかし、応仁の乱で諸堂も寄進状も焼失し、石塔だけが残されている。これらの記録とともに、地域的には江戸時代まで存したとされる、智光寺の隣寺であることから、その子院の可能性は否定できない。その荒廃した伽藍を新たに足利に入った源室永高が再興、つまり曹洞宗への取り込みを行ったのである。

世代の関係においては、源室永高が中興開山である他、長松寺七世の歩巖徹理〔運〕が長林寺十六世となつてゐる。

次に「梁田地区」の長福寺・高沢寺を見てみよう。

長福寺は、長松寺同様、源室永高の開いた寺で、時代は天正年間であるので、長林寺移転後、余り時を経ない時

期であると考えられる。当寺は、例幣使街道が通る近世交通の要所であり、足利の第二の地域であった梁田宿の中心に位置する。

世代の関係においては、後に詳しく触れるが、長福寺四世・至心朔道が長林十五世となるのをはじめ、長福寺十二世・天麟歩舜が長林廿一世である。ちなみに歩舜は樺崎の大乘院の出身であり、その次の世代にあたる長福十三世・歩仙も、大乘院の出身であることが今回明らかになった。これにより、大乘院・長福寺・長林寺という住持の出世のような形式が存した可能性も考えられる。

次に高沢寺であるが、地名は下渋垂町であるが梁田宿の外れに位置し、地理的な問題も含め、長福寺同様、重要な場所にあったと考えられる。開山は雲樵祖養で、足利地域の二代目であるばかりでなく、無量寺・高庵寺そしてこの高沢寺の開山として、足利の地における教線拡大の一翼を担った。

位置的には先に述べたように梁田宿の外れにあることから、長福寺の隠居寺の性格も有していたことが知られる。また、世代の中には、「五世祖域歩禪」という名が確認できる。この「歩」が付く住持は、後にも述べるが、長林寺の十六世歩巖徹理〔運〕〔長松寺七世〕・十九世 嵩山歩嶽・廿一世天麟歩舜〔長福寺十二世・大乘院〕・廿二世 天秀保〔歩〕<sup>4</sup> 宗〔源光寺〕・廿四世 泰玄歩道・廿五世 透秀歩関・廿六世 覚玄歩淳〔長泰寺十六世〕・廿七世 洞玄歩麟、さらに長福寺十三世洞水歩仙等、数多く確認できる。これも同一の嗣法関係により、住持を受け継いでいたことを現すのであろう。

次に、〔袋川流域〕の高庵寺を見てみよう。

高庵寺は、元は袋川の流域にあり、渡良瀬川に通じる交通の要所に位置していたと考えられる。文久二年（一八六二）の寺史によると、開かれたのは天正年間（一説には天正十年〔一五八二〕）で開山は芳岷和尚とされる。そ

の後、元和年中（一六一五―一六二四）、長林八世雲樵祖養が再興したとする。しかし、祖養は元和三年（一六一七）七月一日に寂しているので、祖養の晩年、もしくは彼を勧請開山に迎えた可能性も想定できよう。

いずれにせよ、交通の要所に位置した高庵寺を再興することにより、長林寺の末寺に組み込む方法は、先の長松寺とも共通する展開を示している。しかし、二世名巖堯譽は明暦四年（一六五八）七月廿七日に寂しており、開山との間に若干の隔たりがあると思われる。

なお、元袋川流域の山口家の後辺にあつた高庵寺は、万治年間（一六五八―六一）に大洪水により古書等も流失し、古を知ることが出来ない。さらにこの時、五世良察によつて現在の地に移転されたと記されている。但し、世代表に良察の名はない。後に十世超海和尚の代の寛政七年（一七九五）に火災に遭うも、享和年中（一八〇一―〇四）に本堂を再建している。

高庵寺に関する長林寺との住持の関係は、他の末寺と異なり雲樵祖養以外に確認できない。

最後に、「樺崎地区」の無量寺・源光寺・大乘院を見てみよう。これらの寺院に関しては、『住山記』の記録が重要な意味を持つので、次に一節を立てて論じることとする。

### 『住山記』に見られる長林寺関係僧侶について

まず、無量寺・源光寺・大乘院の地理的な関係を見るならば、樺崎寺（法界寺）との関係が想定されるのではないだろうか。この点に関しては資料もなく、判然としないが樺崎地区に一つの宗教的地域が存在したと考えられる。

その第一の理由は、少なくとも樺崎寺は江戸時代には現存し、明治維新後に廃寺となっている。その成立過程から考えても、中世以降の影響力を江戸期においても少なからず想定できる。第二は、この狭い地域に曹洞宗寺院が

三カ寺も有った点である。過去この地区にどれ程の寺院が存し、現在にまで伝わっているか判らないが、この限られた地域に三カ寺も創建される必然的な理由が見つからないのである。第三に、長林寺にとってもこの樺崎地区の寺院は住持の関係から重要な位置を占めていたことが『住山記』の記録より判明し、単なる一子院に過ぎない寺で無かったことが改めて確認できたからである。

さて、冒頭で指摘しておいたように、總持寺には、その成立当初から輪住制を取り、特に江戸期は全国各地から多くの、一夜住職が上山している。その記録として『住山記』が存する。

今回、長林寺の歴代を調査している過程で、以下のように樺崎地区の諸寺院との意外な関係が明らかにされた。まず、長林十五世至心朔道と十八世活翁禪龍の名が、以下の世代に確認できる。

卷三一、第一万八百三十九、可愼、元禄六（一六九三）、三、一四、義軍・朔道、無量寺、下野、通幻、

〔恭堂可愼、無量寺十世、元文二年（一七三七）九月八日寂、七十七才〕

卷四二、第一万三千百九十五、禪龍、寶永四（一七〇七）、三、三二、朔道・徹運（理）、源光寺、下野、通幻

これにより朔道の弟子の可愼が無量寺十世となっている事と、活翁禪龍が朔道の下で得度し、長林十六世・長松寺七世の歩巖徹理〔運〕の法を嗣ぎ、源光寺の住持の時代に瑞世を行い、その後先に述べたように宝泉寺の住持となり、最後に長林寺十八世となったことが知られる。

次に十九世歩嶽・二十世知足・二十一世歩舜・二十二世天秀・二十四世泰玄の各嗣法関係と出身寺院を見ると以下のようなになる。

卷八二、第二万三千七百四十八、知足、寶曆八（一七五八）、二、一九、歩嶽・歩嶽、大乘院、下野、通幻  
卷八八、第二万六千四百十七、歩舜、明和七（一七七〇）、二、二二、歩嶽・歩嶽、大乘院、下野、通幻

〔長福寺十二世〕

卷八九、第二万六千九百十九、步仙、安永二（一七七三年）、三、一、步嶽・知足、大乘院、下野、通幻

〔世代には無し、長福寺十三世〕

卷九五、第二万九千六百三十一、天秀、天明九（一七七二）、二、二九、步舜・步舜、源光寺、下野、通幻

卷一〇七、第三万五千六百二、泰玄、文化五（一八〇八）、一〇、三、步舜・步舜、長林寺、上野、通幻

以上のように十八世禪龍に続いて、二十世知足・二十一世步舜・二十二世天秀・二十四世泰玄等が、大乘院・源光寺から瑞世を行い、その後長福寺、さらに長林寺に晋住したと考えられる。因みに步舜は<sup>5</sup>大乘院から長福寺、そして長林寺へと晋住したと思われるが、続く步仙も、三十三歳という若さで夭折しなければ兄弟子の後、長林寺に晋住したことも充分想定される。

さらに、各僧侶の受業師・嗣法師の関係を詳しく確認すると、長林寺と樺崎地区寺院との密接な関係も見えてくる。つまり、樺崎地区に存した三ヶ寺は単なる子院ではなく法系的にも、長林寺の住職になるためにも重要な位置を占めていたと考えられる。

長林寺の世代には記録されないが、大乘院からの瑞世師はもう一師確認できる。

卷一三二、第四万八千二百九十二、良道、元治一（一八六四）、八、一一、良光・良光、大乘院、野州、通幻

この良道・良光両師とも、どのような関係か、他の寺院の世代にも記録されていないので判然とはしないが、少なくとも幕末の時期まで總持寺に瑞世師を送り出すだけの寺院の機能と経済的余力とを有していたと考えられる。

また、長福寺の世代を確認すると步舜・步仙以外に、

卷三九、第一万二千五百四十七、麟鳳、元禄一六（一七〇三）、七、二二、為圓、禪透、長福寺、下野、通幻

卷七六、第二万一千九百十七、禪廓、寛延二（一七四九）・二・一八、昌禪、學禪、長福寺、下野、通幻  
卷九八、第三万一千二百十五、歩山、寛政五（一七九三）・二・二三、歩仙、知山、長福寺、野州、通幻  
と、瑞世師として三師が記録されている。

この内、嗣法関係も含めて各僧侶を長福寺の世代の中に確認すると、

麟鳳は、長福七世大宗麟鳳（宝暦四・七・一〇〔一七五四〕寂）

禪廓は、長福八世洞雲禪廓（宝暦八・一二・一三〔一七五八〕寂）

歩山は、長福一五世運充歩山（文政六・一〇・一七〔一八二三〕寂）

歩仙は、長福一三世洞水歩仙（安永五・八・一八〔一七七六〕寂）

知山は、長福一四世知山碩道（天明八・九・三〔一七八八〕寂）

となる。以上のように、長福寺も樺崎地区の諸寺院と並んで、瑞世にこれだけ送り出す法系上の重要な位置と経済的余裕があったと思われる。

因みに、他の末寺のうち瑞世師が確認できるのは、高庵寺だけである。

卷一三〇、第四万七千二百八十九、宗孝、万延二・三・二（一八六一）、大宗、大宗、高庵寺、野州、通幻

この宗孝は世代表によると、

高庵寺十五世戒学宗孝、明治二六年六月三〇日（一八九三）・武州松源寺ニテ示寂、

であろう。ただし、嗣法師の大宗に関しては、世代に確認できない。

しかし、その他の長泰寺・宝泉寺・長松寺・高沢寺、さらに蓮光寺・喜運寺の名は確認できないので、全ての末寺、全ての寺院から瑞世師を出すことが可能だったわけではないことが分かる。

さて、論を無量寺に戻してみたいが、この寺だけが現存しており、明治初期の混乱期大乘院と源光寺はこの寺に吸収されたようである。その為、他の寺院に関しては記録が残されていないが、無量寺だけは寺伝と世代がはつきりとしている。それによると、開山は雲樵祖養であるが、世代表には以下のような記述が見られる。

開山前永平雲樵祖養大和尚（元和三・七、一三（一六二〇））

前住開山鎮翁良大和尚（文禄一・一、二七（一五九二））

當寺前住再會興行鈍長心大和尚

二世明堂梵喆（元和三・八、二〇（一六二〇））〔長林九世〕

この前住開山鎮翁良大和尚と當寺前住再會興行鈍長心大和尚の二人の僧侶をどの様に位置付けたらよいのであるうか。鎮翁良大和尚は、文禄元年に寂しているので、雲樵祖養が開く前に寺があり、住持がいたと考えられる。しかし、後に法系が続かなかったので、曹洞宗による再建がなされたのであろうか。これは、先に述べた長松寺と同様の事例と想定される。

では、鈍長心大和尚は、どのような位置づけになるのであろうか。鎮翁良と雲樵祖養の間と考えるべきであらうか。結論は出ないが、以上二人の僧侶の存在から、雲樵祖養入寺以前の寺院の存在が想定できる。

ここから先は推測の域を出ないが、法界寺周辺の宗教事情は如何なる物であったのか改めて考える必要が有ると思われる。つまり、中世から近世に掛けて、確かに法界寺は存在し、ある時期から衰退していった歴史は確認できるが、その実状については判然としない。ましてや法界寺の子院や塔頭の類も当然存したと考えるのが妥当であり、それらがいつ頃まで、どのような形で機能していたのかは今後の課題と考えられる。そのような、法界寺を中心とした諸寺院の流転の中で、無量寺を始め、樺崎地区の諸寺院を位置付けることが可能なのではなからうか。



さらに、江戸時代におけるこの地域の寺院の経済的状态は、比較的裕福だったのではないかと思われる。それは、曹洞宗のこの三つの寺院を維持するためには、かなりの経済的基盤、つまり田畑を必要としたと考えられるからである。また、遠く能登まで瑞世師を送り出すには、それなりの規模を有さなければ成らなかったはずである。因みに、当時瑞世師料だけで五十両、更に路資や道正庵での滞在費等、かなりの金額が必要だったのである。また、瑞世の許可を得るには、元和元年七月（一六一五）の「永平寺諸法度」によれば、

一 遂二十年之修行、致江湖頭、經五年僧、有転衣之望者、以嗣法師之推挙状、致登山可申理、從當寺就傳奏、申降綸旨、以其上、出世 轉衣、可有披露、付、非三十年修行了畢者、不可立法幢事

とあり、二十年の修行の後江湖頭になり、さらに五年の修行を要したのであるから、その修行を支える基盤も必要だったということである。無論、この法度がどれ程厳密に機能していたのか簡単にはいえないが、少なくとも、瑞世師の前提として押さえておく必要はあろう。

そして、長林寺に晋住する前提として、樺崎地区の諸寺院で修行し、總持寺の住持を勤める必要があったと考えられる。

明治維新後、廃寺となった大きな理由が、檀家を持たなかった事と推測される。しかし、それと江戸時代における経済状況とは必ず共一致しないのでは無かろうか。また、長林寺から見ると、単なる一子院ではなく、法系的にも重要な位置を占めており、その関係は大変密なるものが有ったと考えられる。

## 二つの長林寺の法系上の問題

最後に、足利移転以降の長林寺を考えると、もう一つの長林寺を考えないわけにはいかない。本論では、相互

の歴史的問題を考察するのではなく、先にも引用した『住山記』の記述を通して法系上の関係を確認してみたい。

論を進めるに当たって、もう一つの長林寺に付いて概観しておこう。足利市内の西宮には、もう一つの同名の長林寺が存する。しかも、曹洞宗寺院である。(便宜的に西宮長林寺と山川長林寺という呼称で区別する) 他宗であるならばいざ知らず、何故、同じ名前の寺院が存するのであろうか。

まず、西宮長林寺は、妙高庵末の福井の慈眼寺の末寺であり、末寺六カ寺(高福寺・法樂寺・心通院・長徳院・高林寺、以上栃木県。常明寺、以上茨城県)を有する通幻派の寺院である。

この西宮長林寺の歴史に関しては、先に記した『大祥山長林寺の歴史』に詳しいが、それによると当寺は、両崖山の足利城を修復して入った長尾姓足利氏初代景人が文安五年(一四四八)開創したとされ、長尾氏歴代の菩提寺である。開山は、福井の竜興寺から招いた大見禪龍(二三九一―一四五六)で、寺名を大祥山龍澤寺とした。但し、それ以前に旧地に大祥山長雲寺(臨濟宗)があつたと考えられているようである。

後に、傑伝禪長が入り、寺名も竜沢山長隣寺と改めた。さらに八世光巖齋瑞の代、桐生の金竜寺の大拙齋芸が牛久に移るのに随い常陸に移り、慶長七年(一六〇二)に常陸竹原(現・東茨城郡美野里町字竹原中郷)に竹原長林寺を開いている。

金竜寺の大拙齋芸は、改めて言うまでもなく、岡見氏滅亡と共に焼失した牛久の東林寺の再興に努め、金竜寺と改称した禅者である。ここにも、二つの長林寺の奇妙な関係が見られる。

そして、竹原の長林寺の三世月嶺宗波が、再び足利の地に戻り、長林寺の再興を期すこととなる。しかし、旧地の山川には既に了庵派(即庵派)の源室永高が福聚山長林寺を再興していた。ただし、山川長林寺が最初からその名であつたかという点、寛永十二年(一六三五)成立の『曹洞宗通幻派本末記』諸宗本末帳には「東林寺」の寺名

であるし、長林寺文書の「蓮光寺蕃道書状」（一六八〇年頃）にも、「東林寺」の記録があり、当初から「長林寺」の寺名を用いていたかは判然としない。

月嶺宗波は、元和元年（一六一五）に、西宮の地に長林寺を再興し、正式に晋住し、そして、現在に至っている。以上から西宮長林寺は、山川長林寺よりも足利における歴史は古く、その影響は大きかったと思われる。

また、様々な資料や山川長林寺の近くには心通院跡という地名が残されていることなどから、山川の地に旧長林寺が存したことは史実と見られており、源室永高がこの地に寺を再興した意図も旧長林寺の影響を意識した結果と見ることが出来よう。

このように、二つの長林寺は、足利と常陸という二つの地域を相互に行き来するように関係し合い、大拙斎芸等の禅者も交えて互いの関係は、深いものがあつたと考えられる。

さて、西宮の長林寺が元々足利の地に在ったのに対して、山川の長林寺は先の述べたように戦国の末に牛久から移転してきたのである。当然、寺名は東林寺のままでも良かったのではなかろうか。事実、その初期の段階では東林寺を名乗っていたようである。また例え、牛久の東林寺が足利の地に再興されたとしても、名称を変える必然性が見当たらないといえよう。事実、牛久の東林寺は、再興されたとき金竜寺と称したが、後に東林寺と旧名に復している。

それでは何故、長林寺へと改称するような展開を示したのであるのか。仮説ではあるが、もう一つの長林寺に対抗するためにあえて名前を変えたのであろうか。そこには、山川長林寺の教線拡大の動きや、西宮長林寺に対抗する動きも想定されうる。この問題に結論を示すことは出来ないが、牛久の東林寺から足利山川の東林寺へ、さらに足利山川の長林寺へと変遷する過程は、戦国期から江戸期、そして幕藩体制下への組み込みという、長林寺の置か

れた当時の状況の中で、寺院を維持・発展させていった当時の禅者達の苦勞を読みとることが出来よう。

以上のように二つの長林寺は複雑な関係にあるが、一方で西宮長林寺と山川長林寺は法系の上で密接な関係があることが新たに確認できた。

それは、長林寺第十七世、悟山・元明の法系に関する問題である。

先に樺崎地区の寺院を論じたときにも使用した、『住山記』の資料を検索すると長林寺の歴代の一七世の悟山についての記録が、『住山記』巻七〇に、

第二万二百一世、悟山、元文六（一七四一）、三、三 覺翁・湛然 長林寺、下野、通幻

とある。ここに記される受業師・嗣法師の覺翁・湛然共に山川・西宮の両長林寺の世代には確認できない。

ところが、同じ『住山記』巻七〇には、

第二万百九十七世、藏海、元文六、三、三 覺翁・湛然 地藏寺、下野、通幻

とあり、同じ覺翁・湛然から受業・嗣法した者が同日に上山している。

そこで覺翁・湛然の関係を調べ直してみると、湛然の関係について以下のような結果が確認できた。

#### 〔湛然の関係〕

卷七〇、第二万百九十六世、	泰麟、元文六、三、三	麟道・湛然	洞源寺、下野、通幻
卷七〇、第二万百九十七世、	藏海、元文六、三、三	覺翁・湛然	地藏寺、下野、通幻
卷七〇、第二万百九十八世、	祖海、元文六、三、三	麟道・湛然	天勢寺、下野、通幻
卷七〇、第二万二百世、	禅切、元文六、三、三	萬仞・湛然	正法寺、下野、通幻
卷七〇、第二万二百一世、	悟山、元文六、三、三	覺翁・湛然	長林寺、下野、通幻

卷七一、第二万四百四十六世、諦心、寛保二・三・一六 観心・湛然 林昌寺、下野、通幻  
 卷七一、第二万四百四十七世、古燈、寛保二・三・一六 理山・湛然 龍昌寺、下野、通幻  
 ここに記される、寺院の本末関係を見直すと以下のようなになる。

洞源寺（廃寺・成高寺末）

地藏寺（成高寺末）

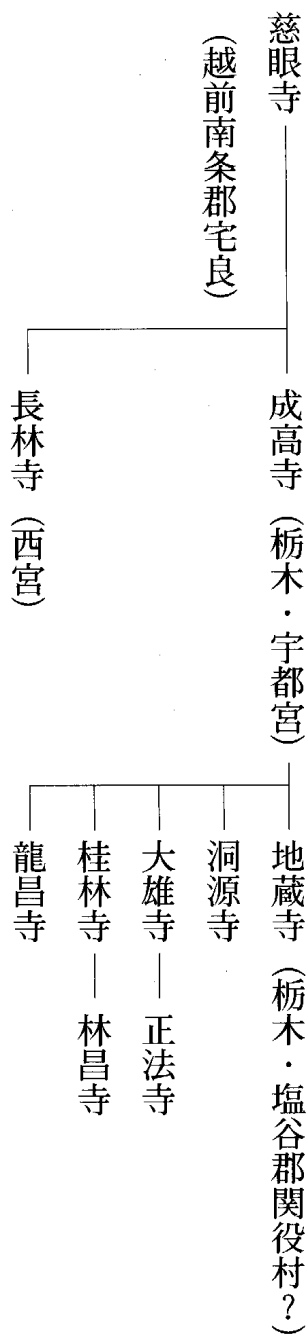
天勢寺（未詳）

正法寺（廃寺・成高寺末の大雄寺（那須郡黒羽）の末寺）

林昌寺（林松寺か。成高寺末の桂林寺（宇都宮）の末寺）

龍昌寺（成高寺末）

不明の寺院もあるが、おおよそ成高寺末の関係寺院であることがわかる。この成高寺の本末関係を西宮長林寺を加えて図にすると以下のようなになる。



つまり、成高寺は西宮長林寺と同末で、そこに関係する寺院に覺翁・湛然の弟子達が深く関わっている点はどの

様に捉えたら良いであろうか。推測ではあるが、当時、湛然を中心とする禪者が、下野の国で大きな勢力を形成していた。この禪者は、成高寺のグループと考えられる。そこで、嗣法した者達が、主要な寺院の住職に晋山していたのであろう。その流れの中に山川長林寺も位置付けられるのである。

因みに、成高寺は、山川長林寺と同じ通幻派ではあるが、通幻寂霊の弟子の天真自性（？～一四一三）を開山とする福井の慈眼寺の系統であり、大雄山最乗寺を創建し関東に教線を拡大した了庵慧明（一二三三～一四一一）の法系とは異なる。

しかし、この後も悟山の法が伝わったのかは、先に示した十八世禅龍・十九世歩嶽・二十世知足・二十一世歩舜・二十二世天秀・二十四世泰玄等が、大乘院・源光寺・無量寺から瑞世を行なうが、派名は通幻派を名乗るのみでその詳しい法系を知る事はできない。この法系が一時的なのか、後の世代にまで繋がっていたのか不明であるが、了庵派（即庵派）の長林寺に違う法系、それも西宮の長林寺に近い法系の住持が入っていたことは、相互の關係を見直す点からも注目されよう。

## 結論

資料も少なく、推論の域を出ない論考に終始してしまっただが、長林寺の歴史を末寺の展開から見ると、曹洞宗の発展の大きな流れと当に軌を一にすることが改めて確認できた。

それは、戦国期の牛久地域と江戸期の足利地域における展開に、それぞれ大きな特長が存することに表れている。曹洞宗の展開の時期には四つのピークがあることが知られているが、この戦国末の時点は、まさにその最後で最大のピークと合致するのである。

さらに、本論では、『住山記』という今まで、あまり使用されることの無かった資料を通して、長林寺の世代を確認するという作業を行った。その中で、今まで全く判らなかつた、末寺との関係、さらに樺崎地区の諸寺院の位置づけが新たに判明したことは、大きな収穫である。

また同時に、西宮の長林寺との意外な法系上の繋がりを見ることができた。

長林寺の歴史は、曹洞宗の地方展開を考える好資料であり、『住山記』を通して嗣法関係や寺院の展開等の諸問題を考えるという重要な例を示してくれたのである。

註

- (1) 『延享度曹洞宗本末牒』・二二頁
- (2) 内閣文庫所蔵『江戸幕府寺院本末帳集成』巻上・三二四頁(雄山閣)
- (3) 『大祥山長林寺の歴史』・二六頁(平成七年五月二十七日・大祥山長林寺)
- (4) 長林寺史料、栃木目録ノ3に、「源光寺歩宗」とある。
- (5) 長福寺「世代年曆記」の書き込みによる。
- (6) 広瀬良弘『禪宗地方展開史の研究』第二章 曹洞宗の地方展開・一八二頁

\*長林寺世代表 ( )内は寂年

開山 天助高順 (一五一五・二・四) 東林寺開山

二世 一双養派 (一五二八・六・二三)

三世 銘室高信 (一五五七・九・一八) [宝泉寺開山]

四世 意伝宗順 (一五六三・一二・一七) [宝泉寺二世]

五世 大雲梵虎 (一五九二・五・二五) [宝泉寺二世]

六世 天安祖準 (一五九五・二・五) 長泰寺開山

七世 源室永高 (一六〇〇・四・二九) 東京喜運寺・長松寺・長福寺開山

八世 雲樵祖養 (一六一七・七・二三) 無量寺・高庵寺・高沢寺開山

九世 明堂梵喆 (一六二〇・八・二〇) 無量寺二世・[宝泉寺五世]

十世 密伝大察 (一六五〇・五・二八) 長泰寺中興開山・無量寺中興三世

十一世 名巖堯譽 (一六五八・七・二七) 長泰寺二世・無量寺四世・高庵寺二世

十二世 祥山門吉 (一六四三・一・六) 無量寺五世

十三世 海印永覚 (一六七七・九・九) 無量寺六世

十四世 良国存久 (一六八〇・一二・一〇)

十四世 靈覚良源 (一六七八・九・三)

十五世 至心朔道 (一六九三・五・二九) 長福寺四世

十六世 步巖徹理 [運] (一七二五・五・五) 長松寺七世



十七世	悟山元明（二七四一・六・一七）	
十八世	活翁禪龍（二七五〇・六・二八）	源光寺・宝泉寺
十九世	嵩山步嶽（二七六六・九・一五）	
廿世	満全知足（二七七三・四・四）	大乘院
廿一世	天麟步舜（二八一〇・一一・一一）	長福寺十二世・大乘院
廿二世	天秀保〔步〕宗（二八一三・五・二六）	源光寺
廿三世	円之宏道（二八一四・四・二五）	
廿四世	泰玄步道（二八四三・三・二三）	
廿五世	透秀步関（二八五八・五・二〇）	
廿六世	覚玄步淳（二八八四・四・八）	長泰寺十六世
廿七世	洞玄步麟（二九二三・九・二〇）	
廿八世	没量真巖（二九〇九・八・七）	栃木清雲寺十三世
廿九世	祖禪保宗（二九一九・三・三〇）	
卅世	興嶽宗道（二九四八・一〇・七）	
卅一世	宗嶽昭文（二九八五・九・四）	

〔 〕 内の宝泉寺世代は、今回確認できる資料がなかった。世代が記されない者は不詳。